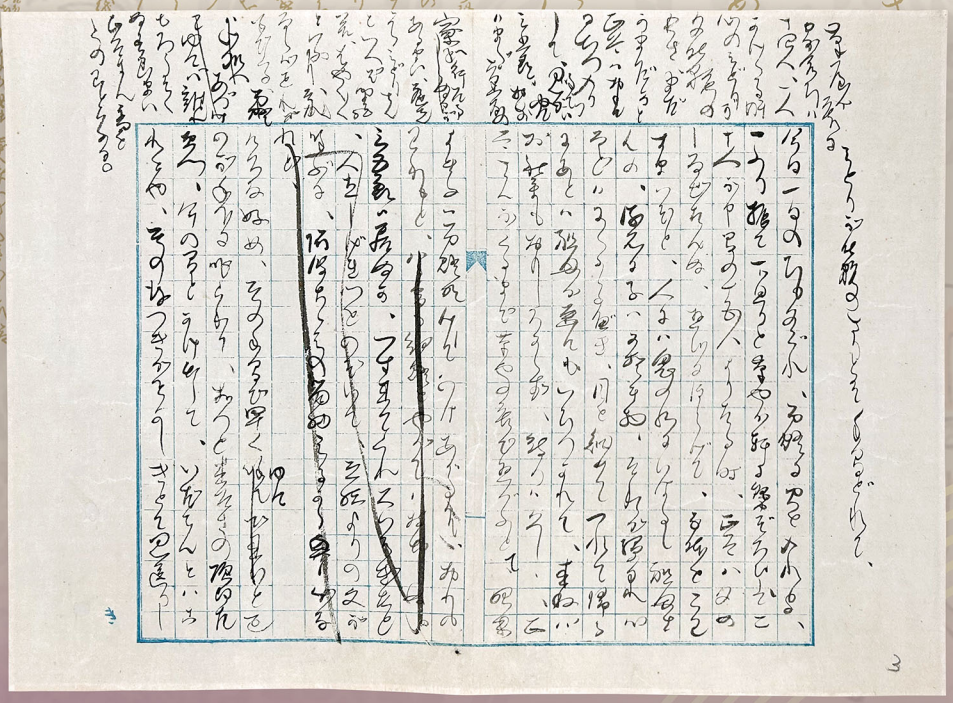
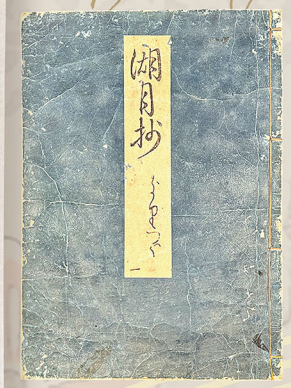
――一葉は何を学び、どのように物語を紡いだのか――



樋口一葉筆「たけくらべ」未定稿



企画展

樋口一葉の 小説のつくり方

令和7年 3月15日[土]～5月18日[日]

開館時間　9:00～16:30（入館は16:00まで）

休 館 日　毎週月曜日（祝休日の場合は翌平日）

※展示替えのため3月10日（月）～14日（金）、5月19日（月）～23日（金）は休館いたします

※ご来館の前にホームページ等で最新情報をご確認ください

入 場 料　一般 300円（200円）、小中高生 100円（50円）

※（　）内は20名以上の団体料金

※障害者手帳、療育手帳、精神障害者福祉手帳、特定疾患医療受給者証をお持ちの方とその介護者の方は無料

主　　催　公益財団法人 台東区芸術文化財団

台東区立 一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4 TEL03-3873-0004
東京メトロ日比谷線三ノ輪駅徒歩約10分
https://www.taitocity.net/zaidan/ichiyo/

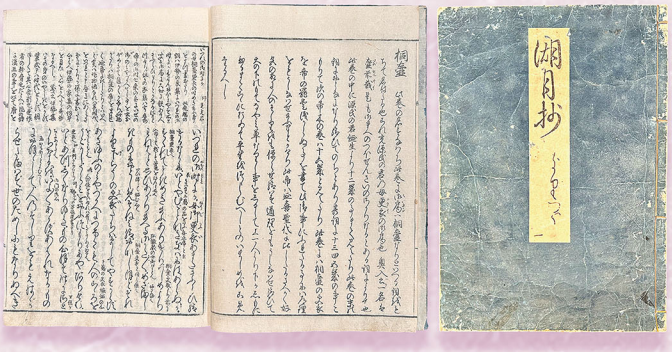
たいとう文化発信

企画展 樋口一葉の
小説のつくり方

―― 一葉は何を学び、どのように物語を紡いだのか ――

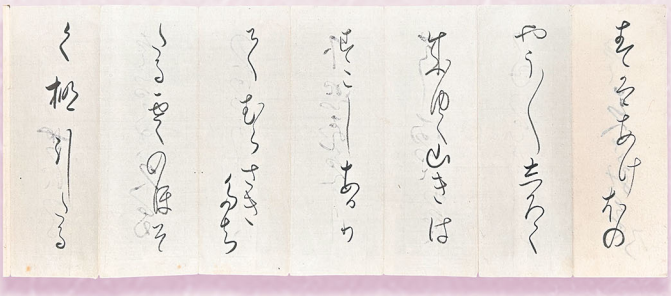
一葉が原稿料で家族の生活を支えようと考え、小説を書きはじめたのは19歳のころでした。しかし、高等教育も受けていない年若い女性が小説を書き、世に発表するのは生易しいことではありませんでした。一葉は、それまでに身につけた教養を駆使し、繰り返し書いては直して文章を紡ぎ出し、作品を世に出すために自ら人脈を築き、広げます。

本展では、作品の素材となったさまざまな書籍や歌塾「萩の舎」での学び、未定稿に見られる執筆の苦労、小説の師半井桃水や萩の舎の姉弟子田邊花圃等作品発表を支えた人脈など、一葉の小説がどのように生まれ、世に出たかを紹介いたします。



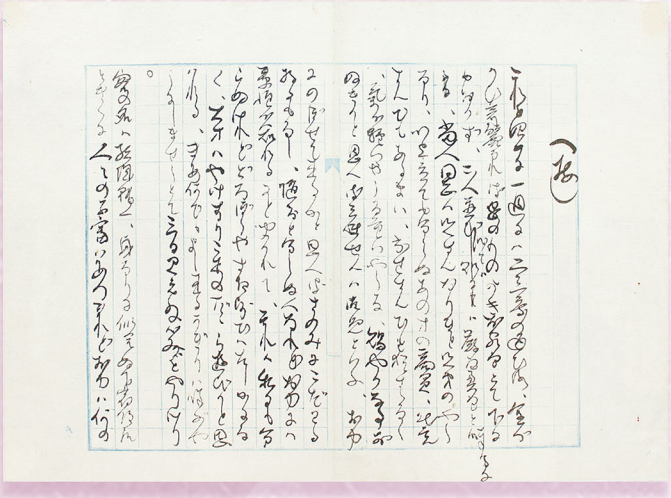
北村季吟『湖月抄』

延宝元年（1673）に成立した「源氏物語」の注釈書。全60巻。書名は紫式部が石山寺に参籠し、琵琶湖に映る月を見て須磨の巻を書いたという伝説に由来する。全文が掲載され、基礎的な事柄が説明されていることから広く流布し、一葉も所蔵していた



一葉筆　妹くにに与えた習字手本

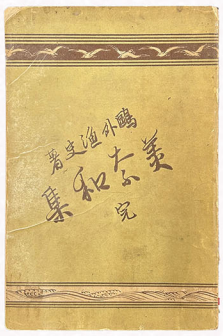
表裏に「枕草子」、「古今集仮名序」の一部が書かれている。14歳から通った歌塾「萩の舎」では和歌だけでなく古典や書も学んだ



一葉筆「にごりえ」未定稿

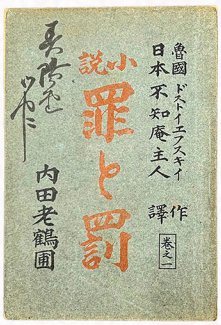
「にごりえ」は当時の一流雑誌『文芸倶楽部』第１巻第９編に掲載された。最終稿では８章立てだが、未定稿では「松」「竹」「梅」に分けて執筆していた

一葉が読んだ本



森鷗外『美奈和（水沫）集』（明治25年7月）

鷗外の第一作品集。小説『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』のドイツ三部作ほか、訳詩集『於母影』などが収録された。一葉は戸川残花に借りて読んだ



内田魯庵訳『小説　罪と罰』巻之一（明治25年11月）

初めて日本語で刊行されたドストエフスキーの『罪と罰』。魯庵が英語版から訳した（未完）。一葉はこれも戸川残花から借りて読んでいる

半井桃水『胡砂吹く風』前編（明治25年12月）

小説の師桃水の代表作。日記に「桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽棲とをかき給へり　又みづからも文に勉むる所なくひたすら趣向意匠をのみ尊び給ふと見えたり」と記している（「よもきふ日記」明治26年2月23日）

台東区立 一葉記念館

〒110－0012 東京都台東区竜泉3-18－4　Tel 03－3873－0004
＊ご来館の前にホームページをご確認ください

アクセス
■地下鉄：日比谷線「三ノ輪」駅　徒歩10分
■都バス（都08系統）：日暮里駅（東口）⇔錦糸町駅（北口）（※いずれも「竜泉」下車）　徒歩3分
■北めぐりん：「一葉記念館入口」下車　徒歩2分
■ぐるーりめぐりん：「一葉記念館」下車　徒歩5分
■つくばエクスプレス浅草駅　徒歩15分
＊駐車場はありません。